

パペ、サタン、 パペ、サタン、アレツペ!

否定されたアイデンティティ

「謙遜とは、すべてのものに対する
絶え間なく脈打つ奉仕の心だ。
美しいものと醜いもの、
良いものと悪いもの、
生きているものと死んだものに」

(マックス・シェーラー『価値観の危機』)

アンリ・ルソー (税関吏) 1897年「眠っているジブシー女」(部分) MoMA, ニューヨーク

www.tonalestate.org
tonalestate2008

3-6 agosto

ponte di legno (BS) passo del tonale (TN)

 **Regione Lombardia**
Cultura, Identità e Sviluppo
della Lombardia



トナーレスターテ2008年 否定されたアイデンティティー

本年、トナーレスターテのテーマは「マルチカルチャーの社会」である。わたしたちはマルチカルチャーの社会に向かい歩んでいる。それは互いに異なりながらも様々な文化が出会えるという社会である。無論、わたしたちの日常に異文化との出会いは既に存在していたが、グローバリゼーションによって最大限にものごとく運ばれ、またたく間に激増してしまった。マルチカルチャリズムは哲学、宗教、科学でさえも、政治、経済、文化的な現実となった。

結局マルチカルチャリズムは、不正を生みアイデンティティーを否定することとなり（ある一つの文化が他の文化の覇権を握り、疎外させることによってそれらを消したり否定したりする）、文化と文明の衝突まで起こしてしまうのか（すでにその衝突を讃美する不遜な者がいる）。あるいはすべての社会的立場で（労働者、教師、学生、医師、科学者など）、社会のすべての状況において人間的、文化的、社会的に真実で尊厳ある対話となるのか、という問題である。異文化を尊重し、それらと対話を求めるマルチカルチャリズムによって生まれる社会的風潮を受け入れるなら、社会における自己のアイデンティティーと文化を携えて他者と平等な立場に立ち、肯定的で活動的な対話、言い換えれば具体的に相手を尊重しながら自信を持って闘い、実を結ぶ対話を建設することができる。

タイトル「パペ、サタン、パペ、サタン、アレッペ」はダンテ・アリギエーリの『神曲』の一節である。ダンテは故意に意味不明の表現を用い、狂った邪悪な心の働きを表現したかったであろうと思われる（数多くの専門家が中世の秩序から用いたと思われるこれらの表現の意味はまだ謎のままである）。しかし、トナーレスターテがこの表現を選んだのは、サブタイトル「否定されたアイデンティティー」によって明らかだ。要するにこれは自民族中心主義と他者に出会わせない怒り狂った試みの表現そのものである。事実、この言葉はプルートに放たれます（彼は食欲の象徴の恐ろしいオオカミである。ダンテ・アリギエーリにとって食欲こそが人間の幸せと社会秩序を破壊する最も危険なものである）。プルートは『地獄』の4つ目の圏に入ろうとしているヴェルギリウスとダンテの旅を止めようとする悪魔である。悪魔が二人の旅を妨げるのは、二人が新しい世界を知ろうとし、その旅を通してダンテ自身が浄化されるからだ。プルートは、異文化間の相互尊重と平等な立場による対話を妨げ、自分と異なる他者を知ることがを妨害し、人間を世間的幸福感に留まらせておきたい権力制度やあるメンタリティー、文化、宗教などの象徴そのものである（しかし、『前に進まないものはすでに負けた』という諺が言うように、その「世間的幸福」に留まったとしても、すでに幻として消え始めている）。それら（権力制度、あるメンタリティーなど）は様々な人間的社会的な現実との出会い、知ること、尊重し合うことを妨げているが、まだ知らない異なるものこそが現実を超える偉大な神秘のしるしである。

今年のイメージは「ル・ドゥアニエ」（税関吏）と呼ばれたアンリ・ルソーの絵である。飢えている恐ろしいライオンは眠っているジプシー女を襲うことができるにもかかわらず、横に立ち止まりその香りを嗅いでいる。エキゾチックでかぐわしいドレスのジプシー女は、静かな月の下で未知なる魅惑的なメロディーに包まれてように眠っている。彼女は、力強い文化や文明の前に現れた「異邦人」、異なるアイデンティティー、何か新しいものの象徴である。彼女のやさしい香りを感じれば、おそらく軽蔑せずに破壊もしないだろう。

引用されている言葉はマックス・シェーラーである。ダンテの『地獄』のプルートの、自分と異なるものを妨げ、恐怖感を与えたい怒り狂った叫びとは異なり、もっとも尊厳のある立場はルソーのライオンと同じように自分と違うものを救い守ることである。しかしマックス・シェーラーが言うように、それは謙遜という現実的な姿勢があるなら可能となる。謙遜とは異なる相手の価値を認め、平等な立場で話し合い、相手に仕える心を持つことである。そうすれば出会いは、相手を否定することなく絶望ではなく希望を、抑圧ではなく奉仕を運ぶ無限の可能性を開く出来事になる。